

現代の文学=7

今 東 光 集



悪 名
—全—

河出書房新社

BA 32090200

現代の文学7 今 東光集

東
光

© 1964

責任編集

川端康成 丹羽文雄
円地文子 井上靖
松本清張 三島由紀夫

昭和 39 年 11 月 1 日 初版印刷
昭和 39 年 11 月 8 日 初版発行

定価 390円

著 者 今 東 光
発 行 者 河 出 孝 雄
印 刷 者 高 橋 武 夫
装 幀 原 弘 (N. D. C)

印刷・大日本印刷株式会社
本文用紙・本州製紙株式会社
函 貼・神崎製紙(ミラーコート)
同 納 入・東邦紙業株式会社
クロース・日本クロス工業株式会社
同 納 入・株式会社小島洋紙店

発行所 東京都千代田区 株式 河出書房新社
神田小川町三の八 会社

電話東京 (291) 3721~7
振替口座 東京 10802

製本・美行製本

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

悪名	三
----	---

年譜	五九
----	----

解説	五八
----	----

高橋義孝
挿画 御正 伸
写真 三木 淳

今
東
光
集

惡

名

鶏 盗 人

薫風が茶の間に吹き込んで来ると、河内野は初夏を思わせる気候だ。

電灯の下の大きな食卓には夕飯のお菜が並び、父の善兵衛を正面に左右に長男の鶴吉、次男の亀治、つづいて姉の悦子、隣りに母のヨシが並んで箸を取るばかりの時に、善兵衛がぐると一座を眺めてから

「朝吉はどないしたんや。居らへんやないか」と言つた。母のヨシはへどもどしながら

「さいぜんまで声しとつたんやが」

「声したかて姿見えへなんだら、居らんのかないけ。われは何ぞちゅうと彼奴のことかばうよつて、彼奴は飯時も忘れて遊び呆うけてけつかるんじや」

「そんなことおまへんけど」

「そんなことあるかれ。われは子に甘いさかいあかんのじや。小ッこい時から駄ちゅうもはんじょうしとかん

と癖になる」

「へえ」

「今夜うせたら飯くわせんな。好えか」

「へえ」

「悦子。われもかげでこつそり飯など喰わしたらあかんぞ」

「へえ」

姉の悦子はうつむいて御飯を口へ運びながら、幽かに頭を動かしたきりだった。悦子は喧しい親父が何ほと言つても朝吉には糠に釘なのは是非ないことと聞いた。二人の兄は心服しているのかどうかわからないが、ともかく表面は親父に叱られるようなへまな真似はしなかった。それなのに末弟の朝吉だけは、いつも尻尾を掴まえられて叱られた。それでいて一向に朝吉は恐れ入らないのである。

「また雷さんが落ちるで」

と弟に注意してやると、朝吉は背戸からこつそり登音を忍ばせながら暗くなつてから戻つて来て

「もう、とつくに臍ないわ」

へらへら笑いながら答える始末だ。

近頃は夜遊びまで覚え、夕飯をたべて箸を置くが早いか、いつの間にか家を抜け出し、遅くならなければ帰つて来ないのだ。朝早い親父は夜も暗くなると寢室に引き

退るので、弟が帰って来るのも気がつかない模様だが、稀に小用に起きたりすると当の本人よりも母や姉の方が気を揉んだ。

「まだ起きとんのか。何してんね。早う寝い。夜ふかしは禁物や」

言いながら、また寢室へ引きあげて行くとほっとした。

入れ違いに朝吉が、閉めた表戸のくぐりから、まるで盗人のように抜き足差し足で入って来るのだ。そんな時だけでも母親が叱言しごの一つぐらい言ったらよさそうなのなのに、叱言どころか

「お腹空いてへんか」

などと言うのだ。

（なんちゆう不見識やね——）

と腹が立ったが、あの氣むずかしい親の眼の前を平氣の平左で抜け出して行つて夜遊びするとは、わが弟ながら天晴れという氣もしたのだ。

夕飯は黙々として終った。

これも何時もの慣いで、飯をたべながら喋ると、父親の雷が鳴った。

「口にも類張って喋るな」

と怒鳴りつけたものだ。河内国の百姓も他所の国の人間も大体同じ習慣を身につけていることに変わりはない。

日本人は昔から「早めし早糞」という哀しい教訓で育ったのだ。飯を喰うということは空腹を満すというだけのことと、舌を楽しませるといふのは良え業よしに限るのだ。況んや便所の中でゆっくりと用を足すのは余程恵まれた人のことで、百姓や町人は早糞を垂れるのでなければ、稼ぐに貧乏が追いつくのだ。きりきり舞いをするという言葉は下平民のために取つてあったのだらう。

父親が夕刊を手にして寢部屋に去ると入れ違いに朝吉が戻つて来た。

「ああ。腹へった。腹め、くうくう言うとる」

と言いながら入つて来ると、そのくせ直ぐに茶の間に上つて来ないで、中庭に出て行つた。

「あれ。朝やん。われ。何持つてんね」

長兄の鶴吉が言つた。

「これか。好えやろ」

「われ。それ軍鶏やないか」

「好え軍鶏やろ」

「どないしたんや。その軍鶏を」

「大きな声出しなよ。おやっさんに聞えるやんか」

朝吉は眉をひそめると、奥の方をうかがつた。

「また、そないなもん持ち込んで、お父うに叱られつで」

姉まで顔をしかめた。

「そない言うたかて、わい、欲しいねやもん」

「そんなとこに置いたら、糞^{うんち}するがな」

「そりゃ鶏やもん、するやんか」

「そんならお前、掃除するか」

「わい掃除するで」

「餌は」

「自分でやるがな」

すると母親が

「その軍鶏。買うたんか」

「もちろん」

「誰にな」

「友達にや」

「友達って、誰やねん。賤いもんでもないのに、誰やねん。心やすう呉れるのは」

「誰かて好えやんか。お母んの知らん奴や」

「文句出ても知らんで」

「案じんかて大事なわい」

朝吉はごとといわせながら、かねて用意してあった林檎の空箱に一羽の軍鶏を入れると、餌箱を入れてやり、欠けた茶碗に水を入れて運んだ。

「そのシャモ。雄か雌か」

亀治も縁にしゃがんで眺めながら言った。物かげの暗い中庭に置かれると、もう眼が見えない軍鶏はおとなし

く突立ったきりで、ことりとも音を立てない。

「きまっとるやないけ。雄やがな」

「若鶏か」

「まだ若いよ」

「喧嘩しとるか」

「まだ喧嘩さらせへんね。傷ひとつ無い」

「ほなら強いかわいいか、わからへんやないか」

「これから噛ましつれて来て、思いきり噛ませて、強うしたんね」

「われに出来るのか」

「見とつてみい。八尾^{やが}一番の軍鶏にしたるさかい」

朝吉はお膳につくと、三口ぐらいに飯を掻^かつ込むとお代りして七、八杯べろりと平げた。

「ようたべるなあ」

姉はあきれながら給仕した。

「毎度のこつちや、これで角力^{すもん}とつてたら、この倍は喰うで」

「この頃、角力に行かへんのか」

「うん。軍鶏の喧嘩場に行つとったさかい」

その途端に母親は朝吉の言葉聞き咎め

「あれ。お前はそんなとこに行つとったんか。え。博奕場へ」

「わい。見とるだけや」

「博突見てるのか」

「博突やあらへん。軍鶏の喧嘩見とるんや」

「同じこつちやないか」

「何いうとんね。ちよつとも同じことあれへん。大人はそりゃ錢賭けてるかしらんが、わいは軍鶏だけ見てんねやもん」

「もう十七、八になったら子供で通らへん」

「何いうてんね。お母さん。徴兵前はまだ子供やで」

「理屈言うもんやない」

すると朝吉は肩をすぼめて、おいしそうに食後の番茶を啜った。

「われ。そんなところで阿呆なこと覚えたら、くすぼりやど」

兄は、じろりと睨んで言った。

「何んやて。くすぼりやてかい」

「せやないか。博突場で錢張らんと見てる奴は、くすぼりやないか」

「そりゃ錢無しが博突なんか見てやで、勝った人からおこぼれもろたりしたら、くすぼり言われたかて仕様ないけど、わいは何も錢賭けへん。軍鶏見に行くだけや」

「この頃、わい等の仲間、生意気に軍鶏持つてるけど何にするんや」

「喧嘩させるに決つとるんや」

「わい等だけでか」

「そうや」

「ふうん」

實際、朝吉の遊びの連れは誰も彼も軍鶏の一羽や二羽を飼っていた。朝吉だけが一羽も持たなかった。残念だったけれども到底あの親父では購ってくれる筈がなかったのだ。兄等も軍鶏は欲しくない筈はなかった。そんなことを口に出すだけ野暮だから、諦めていただけで、朝吉が意気揚々と一羽の軍鶏を持ち込んで来ると、何となくケチをつけながら羨望に堪えなかった。

鶴吉まで軍鶏の箱に近づいて眺め

「おい。朝。もつと大きな箱やないと、此奴、もつと大きゆうなるで」

「そうやなあ」

「鶏冠が箱とすれすれや」

「家にもつと大きな箱はなかったかいな」

「明日拵え」

「せやな。拵えよう思うとつたんや」

兄等もそれぞれ出かけて行つた。どてらを脱いで夜遊び出来る季節になると、兄等まで這い出して行くのだ。

母親と姉が電灯を低く下げて、その下で縫物をはじめた。男の子三人を育てるには手に針を持たない日はなかった。此頃でこそ滅多に朝吉も綻びをこしらえて来なく

なつたが、つい先達までは朝吉の綻びと洗濯に追われたものだ。この部落切つての権太の朝吉は小さい時から肝に毛が生えているのだらうと言われた。

朝吉は夕飯をくつたら直ぐ隙を見て飛び出すかと思いのほか、今夜に限って中庭の軍鶏の張り番をしている。

軍鶏は鳥目で、夜見えない眼を大きく見張つて、人の近づく気配に敏感に向きを変えて立ちむかっている。ぐっと胸を張り、高々と頭をのぼしている姿は何とも見事なものだ。強い脚を踏ん張り、時々、びくりと首を動かして四周に気をくばっている。濡羽色の羽根は電気の光りに映えて美しい光沢を見せているのだ。

軍鶏を見ていると、くすりと笑った。

「何が可笑しいねん」

突然、姉が朝吉の含み笑いを聞きつけて声をかけた。

「何でもないよ」

「せやかて今笑うたやないか」

そう言われると朝吉は、姉の足もとにごろりと寝そべって天井を眺めながら

「わいも軍鶏持ったんで嬉しいねん」

と呟いた。

悦子は自分のお尻を撫でるようにしてから、直ぐ傍に朝吉の頭がころがっているのを気にして

「あっちゃへ頭をやりい。そんなところに頭置いて」

「何んでやねん」

「わてのお尻の傍やし」

「かまへんやないか」

「怪態な子やなあ。厭やし。頭の向き変えてんか」

「何も姉さんのお尻の匂い嗅いでんねやあらへんで」

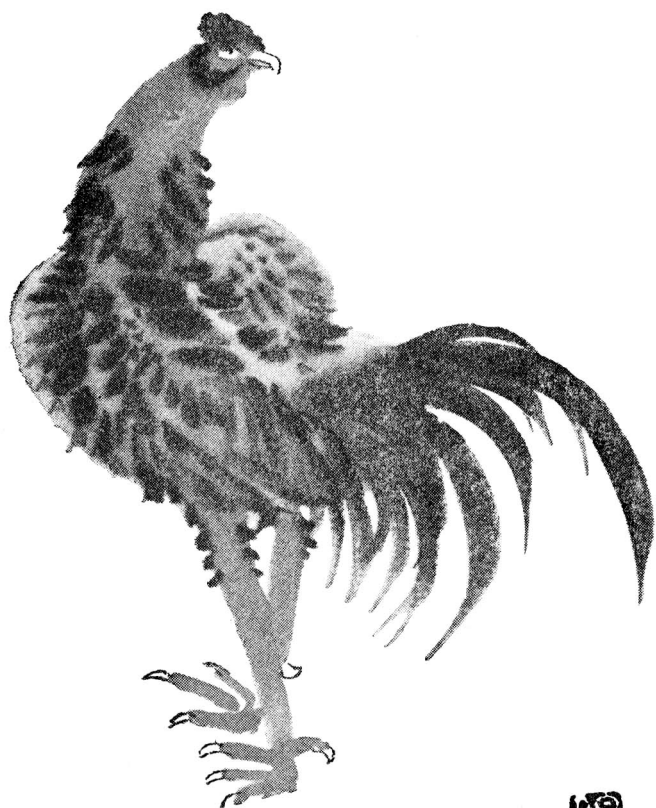
「厭やなあ。この子……」

姉は思わず赧くなると、ぐっと手を伸ばして朝吉の顔を押しやつた。本当に弟にお尻を嗅ぎ廻されているような気がするのだ。弟とは思ひながら、思いなしに此頃は朝吉も男臭い匂いを発するようになって来た。声変りする時分から

（男は厭らしい——）

と思わずにはいられたかったが、三人の男ばかりの兄弟の中にいると、少年から青年に成長する過程に何か厭らしいものを本能的に感ずるのであった。声変りする頃から面皴が吹き出たり、ひっそり独りで自分の猿又を洗濯しているのを見ると手伝つてやろうとする気持ちを押えるものがあつた。何故、自分で密かに洗濯するのかわからない。わからないけれども男性の秘密というものを身内がぞくぞくするほど妖しい香氣に包まれて感ずるのだ。

朝吉は仲間が悉く軍鶏を持ちはじめると羨ましくて仕様がなかつた。軍鶏を持っていないのは辰ちゃんと自分



の二人きりだった。

「よォ。辰ちゃん。軍鶏ほしいな」

「ほしいな」

「何とか手に入れへんか」

「入れたいな。どないする」

「買うこと出来へんなら、盗むより仕様ないやんか」

「えつ。盗るのか」

「そうや」

二人は軍鶏を盗む計画を樹てた。

村内では直ぐ露見する。隣村といつても小坂合村では八尾街道をさしはさんで対い側といふほど隣接しているので、これも差支える。一層、遠出をすることにした。

彼等は十町あまりも遠い萱振村に行き偵察した。

これと目星をつけた若い軍鶏を数日ねらった。

軍鶏は喧嘩鳥と言われるくらいだから相手さえ見つければ死ぬまで闘う。それゆえ普通の鶏のように飼ひ放すことがない。必ず唐丸籠に伏せて入れておくのだ。それだけ盗みにくい。

萱振村の軍鶏好きの家の庭に忍び込み、辰ちゃんが籠を開けると、朝吉が盗む段取りだ。ばたばた暴れられると面倒なので、それには計画が必要だった。

彼等は泥鰻を捕えて来た。

河内平野の田圃や水の流れの何所にでも泥鰻がうよう

よしていた。彼等はそれを捕えてくると、肥って丈夫そうな奴を選んで萱振村に出かけて行った。

晴れた日がつづいた。

生駒連山が紫色にかすみ、漸く田はいちめん青々と生色をみなぎらしていた。辰ちゃんはバスケットをかつぎ、朝吉が仕掛けを運んだ。

その家に近づくと家人が野良に出ているのを確かめた。

かなめ垣を踏み越えて侵入すると、朝吉は目当の唐丸籠の傍に泥鰻を投げてやった。軍鶏は目を光らせ、頸を伸ばし、一尺ほど離れたところで、びん、びん跳ね廻っている肥った泥鰻を呑み込もうと焦った。

「そこやッ」

と声をかけると、辰ちゃんが後から唐丸籠をすうと持ち上げる。軍鶏はいきなり泥鰻にかぶりつくと、ひと呑みに呑み込んだ。

ところがこの泥鰻には仕掛けがしてあるのだ。木綿針の真中を丈夫な糸でくくり、泥鰻の身体に針を縦に刺してあるのだ。軍鶏が泥鰻を鵜呑みにすると、その途端に糸をたぐり寄せるのだ。針が横になるから軍鶏は糸のまにまにたぐり寄せられる。しかも軍鶏は決して声を立てない。手もとに近づいた時、ぐっと掴んでバスケットへ放り込んだ。

鶏泥棒はみなこの手を使う。これは鶏のけたたましい鳴声を封ずる唯一の手だった。朝吉と辰ちゃんは、この手でうまうまと二羽の軍鶏をせしめた。

辰ちゃんの家の裏庭で、軍鶏の口から泥鰌を引き出した。軍鶏は目を白黒させてばたついた。頸のところまでそろそろと引き出しておいて、ぐいと押えると針の尖が突き出る。その針を抜いてやった。軍鶏などは針で突いたぐらいでは驚かないのだ。喧嘩した裂け目を木綿針で縫いつけてやるくらいだから、あつという間に針を抜くことが出来るのだ。

辰ちゃんは唐丸籠を用意してあつたので、自分の軍鶏を入れると大得意だった。

「でや。この赤毛」

「好え軍鶏や」

「せやろ。餌がええよって羽根の色に艶があんな」

「わいのかて見てみい」

「瑠璃色ちゅうのと違うか。朝ちゃんのは」

「そうらしい」

「それはもう一つ好え軍鶏やったな」

「わい。これ覗うとってん」

「せやったな。苦勞さしよった……」

二人は顔を見合せて会心の笑みをもらした。

母や姉が寝ようとする頃、二人の兄も戻って来た。

「まだ見とんのか」

亀治兄が中庭の軍鶏を見とれている朝吉に驚いて声をかけた。

「うん」

「明日、おやっさん怒りよんで」

「なんでや」

「軍鶏なんど飼うたちゅうて」

「銭出して買うたんやないさかい、文句言われる筋無いやんか。無駄遣いしたんと違うやないか」

「軍鶏なんか飼うの、極道者のすることちゃ言うで」

「そんなことないよ。この所の百姓かて飼うてるやないか。あれは極道者やないで」

「まあ見とってみい」

その夜は皆寝てしまった。

朝吉は親父に叱られるより、軍鶏泥棒の噂がこの村にも聞えて、父親からその嫌疑を蒙る方を怖れた。どんな折檻を受けるかと思うと、おちおち夢を結ぶことも出来なかったのである。

朝吉は夜中に一度、目が覚めた。大きな軍鶏が自分を目がけて突つかかって来るのだ。右に左に体をかわして避けていたが、見る間に自分の身体が何時の間にか軍鶏に化けているのだ。

「厭や、勘忍して……」

思わず叫ぶと、その巨大な軍鶏は自分に喧嘩を売って来たのではなくて、自分を雌鳥と間違え、物凄い男根を振り立てて襲いかかって来るのだ。

「違う。違う。わい。男や」

いくら叫んでも彼の耳には聴えぬらしい。彼は自分を押えつけ、鶏姦しようと頻りに焦るのだ。朝吉は全身びっしょり汗をかきながら身悶え、ばつちりと目を覚ました。

今まで見知らぬ女体を夢に見て精を洩らした経験はあったが、男性から襲いかかられた夢は生れてはじめてだった。

「誰ヤッ。こんなもん持って来たんは」

果して夜が明けたか明けぬのに、雷のような親父の声が中庭で爆発した。

朝吉の性夢はいっぺんに消し飛んだ。

覗き 六

「やい。居るか」

辰吉は聞きなれた声に、ひょいと顔を出すと、小脇に軍鶏を抱いた朝吉が蒼い顔をして立っているのに驚いた。

辰吉も早起きして自分の赤毛の軍鶏に餌を与え、二時

間ほどゆっくり鑑賞して、これなら友達仲間でも結構、自慢ができるわいとほくほくもので朝飯を終わったところだった。彼は箸を捨てるようにして表へ出て行った。

「どないしたんや。軍鶏、なんぞあつたんか」

てっきり朝吉の軍鶏の工合が悪いのではあるまいかと想像した。

「せやない。軍鶏は元氣や」

「ほなら何んで抱いてんねや」

「それには訳あんね。これ、どこぞに置くとこないか。われのところに唐丸籠あれへんかいな」

「もう一つある」

と言うと辰吉は駆け出して行って納屋から、も一つの唐丸籠をさげて来た。

「われ。用意好えな」

「そういう訳やないけど、こんなもんは一つより二つ用意しておく方が好え思うて、小父さんのところから借りて来たんや」

「そうか。頼むわ」

朝吉は唐丸籠に軍鶏を伏せると、ほうと顔が明るんで来た。朝吉の軍鶏も昨夜は狭い木箱の中に押しこめられ、身じろぎも出来ない思いをしただけに、陽光のちかちかときす庭土に立って唐丸籠の中に放されたのだから、晴れ晴れとした顔つきに見えるのだ。

「やっぱり元氣やんか」

「うん。この方が気色が好えらしい」

「おやつさん。怒れへんか」

「怒ったの何んので。われ。朝っぱらから雷が落ちよったがな」

「そんなこっちゃと思うとった」

「わいな」

朝吉は俄かに声をひそめると四周を見廻した。

「誰ぞ家に居らへんか」

「お母^おんだけや。それも台所に居るわ。何言うたかて聞えへん」

「そうか。わいな。夢精したんや。此頃ちよいちよい怪態な夢見るんや」

「ほうか。実は、わいもや。あいつやると又（猿又）をよごすやろ。あれが難儀やねん。自分で洗わんならん」

「われもそうか。昨夜はな。姐^{あね}やんのねきで寝そべったら、彼奴め、お尻^{おしり}の匂い嗅ぎなぬかしくさんね。わい、いっぺんも考えてへんことやのに、あないに言われると妙な氣になったんやな」

「ふむ。それからどないしてん」

「どないもなれへんがな。肉親の姉やんか。せやけど姉やんにそない言われると、彼奴のお尻から何やら匂いがあるような氣がしてるねんや。それで寝たさかい堪らん

わ。あんじょ夢精してしもた」

「姉弟でかあ」

「阿呆。それが軍鶏とや」

「どっちゃが阿呆ぞい」

「それで、わい、びっくりしたがな。そんな夢、生れてはじめてや。よくよく軍鶏に惚れてんねな」

「おい。われ正気か。朝っぱらから」

「まあ聞け。そこへ頭^{たま}から雷が落ちたと思え。何も彼もあれへん。いっぺんに夢醒めてしもた」

「せやろ」

「それから説教や」

「説教だけか」

「うん。今朝はどやされなんだ。親父めな。わいが友達から貰^{もら}た言うてもな。聴きよれへんね。やっぱり眼^め高^こい」

「盗^{ぬす}つたちゆうんか」

「それとは言わへん。大体このところの者^{もの}で軍鶏飼うて遊ぶような奴に碌な奴あれへんと言うねん。手爪先を綺麗^{きれい}にするような百姓ないちゆうねん。軍鶏博^{はく}突^とおぼえたら家屋敷を失う奴や。まして軍鶏に凝^こって他人^{ひと}様の軍鶏が目につくようになったらお仕舞いやとぬかしくさった」

「見通しやな」